

谷川俊太郎 エトセテラ



エトセテラ

なんとかかんとかエトセテラ——つていうふうに言くと、なんとかかんとかのほうが大切で、エトセテラのほうはどうでもいいって感じだけど、エトセテラってのは実はそんなに軽いものでもないと思う。量で言うとか、なんとかかんとかはほんの少しで、残りのエトセテラのほうがうんと多いってこともあるし、なんとかかんとかは名づけられるけれど、エトセテラは名づけられないほどのひろがりをもつてるとも考えられるよね。

エトセテラは要するに或る集合の全体を暗示しようという意志をもった言葉だと思うんだ。エトセテラはしっぽみたに見えるけど、その先っぽは闇に消えている。たとえば自分という存在は、人類ABCエトセテラのうちに入るかもしれないけれど、その自分はまた、大脳、小脳、心臓、肝臓エトセテラででき上っているんだものね。名づけて区別できるものはこの世に多いけれど、そうできないものもつと多い。

いわば……∞みたいな動きがある、いくら細分化して分ろうとしても、どうしても分らない、分けられないものを、エトセテラは含みこもうとする。とすると、この本だってまんざら面白くないこともないかもしれない。あれ、カバーだけ立ち読みして中味は買ってくれないんですか？



谷川俊太郎エトセテラ



No. 22R1400 OUR \$5.10



後

谷川俊太郎 エトセテラ

一九七九年十一月十日 第一刷発行

著者 ————— ©1979 谷川俊太郎

発行者 ————— 大和岩雄

発行所 ————— 大和書房

東京都文京区関口一―三三 電話・二〇三―四五一一 振替・東京六―六四二二七

印刷所 ————— 奥村印刷

製本所 ————— 誠幸堂

装幀 ————— 和田誠

本文構成 ————— 長尾信

定価 ————— 一一五〇円 0095-051190-4406

— 谷川俊太郎エトセテラ —

— 目次 —

エトセテラ — はしがき — カバー

シアーズ・ローバック — カラージュ — 見返し・扉

おもちゃ考 — 無駄話 — 6

墜ちた男 — ショートショート — + 和田誠 — 8

押入の中 — ショートショート — + 和田誠 — 13

離乳食 — ショートショート — + 和田誠 — 19

こどもがふたり — えかきうた — 26

自分たち — 劇画詩集 — + 赤塚不二夫 — 27

なんにもない? — 落書き — 40

パーティー — 戯曲 — 46

私はこうして死にたい — アンケート — 64

海曜日の街 — 詩 — + 横尾忠則 — 66

生誕について — 短歌 — 70

Nostalgia — 無駄話 — 72

自画像など — カタログ — 75

おかしな声を発明したい — 対話 — + 友部正人 — 81

エデンの園 — ショートショート — + 和田誠 — 96

りんご — ショートショート — + 和田誠 — 99

休憩——フィルム——
106

現代詩入門問答——問答——
110

ぺ——フォトリミュージカル——+細江英公——
119

ほめうた——アコースティック——+長新太——
125

あきびん考——広告コピー——+元永定正——
126

まんじゅううちゅう——手紙——+斎藤雅見——
128

クリフトンN.J.——歌——+小室等——
130

お早うの朝——歌——+小室等——
132

夏が終る——歌——+小室等——
134

今度どこへ行くんだって?——対話——+矢野顕子——
136

マザー・グース——翻訳——+長新太——
155

マザー・グースと私——無駄話——
174

〈ぞにべていせ〉地方の〈あじらこもね〉
祭において歌われる〈ぞにべごもな〉
記録——+長新太——
177

はる——自作自註——
178

ロツテルダム1977——報告——
180

股旅——映画脚本——+市川崑——
192

ありがとう概説——あとがき——
229

谷川俊太郎エッセエテラ

おもちゃ考

無駄話

ぼくにとっては、おもちゃを数えるよりもおもちゃでない物を数えるほうが早いような気がする。物書きだから鉛筆と紙だけはおもちゃではない（と、一応言っておく）。だがその他の物のほとんどを、ぼくはいつもいくらかおもちゃ扱いしているみたいだ。たとえばいま、目の前にある電話器だけど、これはもちろん大変実用的な道具なんだが、ぼくは公社支給の黒いやつがきらいで、白くて軽い、ベルの音量の調節できるのに代えていて、たいした用事もなく、友人の家の番号をまわすときなんか、ぼくはたしかにダイアルの手応えを楽しんでいる。子どものころ、ボール紙の筒に薄い紙をはって、糸でつないだ電話を作ったものだけれど、そのときの心持に近いな。

小さいときから、からくりのある物、動く物が好きだった。その最たるものは自動車で、自動車のおもちゃはずいぶん親に買ってもらった。なんにも仕掛のないただ押して遊ぶだけの、いちばん軽べつしていた。フライ・ホイールのついたのはその次、当時はまだ電気仕掛のはほとんどなかったから、ゼンマイで動くのが最高だったのさ。いまでも失くして惜しいと思うてるそのひとつは、走らせると自動的に右折や左折をして、同時に方向指示器の出るやつだ。それから、いまではほとんど見なくなったけど、ワイヤ・スポークのついた自動三輪の精巧なおもちゃも持っていた。

ごっこがごっこでなくなるっていうのが、人間の成長のすじみちだけど、おもちゃが本物になったら、それで世界が一変するってんでもないよね。ぼくが生まれて初めて買った本物のシトロエン・2CVは、そのかつこうからしてブリキ製のおもちゃのようだった。おかしなことに、それ以後、車を買いかえるごとに、ぼくはその車のモデル・カーを買ったり作ったりして手元に置いている。ほんものの世界と、世界の雛型ってのは、全く断絶してるわけじゃなくて、どこかで

つながってるんだね。それをむすびつけるのは、われわれの内心にかくされたどんな所有欲なんだろう。

ぼくは空想の世界で遊ぶよりも、手で触れることのできる物で遊ぶほうが好きな子どもだった。大人になっても、その性質は変らない。萩原朔太郎は立体写真や手品を好んだというけれど、それは彼の詩の本質にかかわっている。比べるのはおこがましいが、模型飛行機や短波ラジオの好きだったぼくの性質はきつとぼくの詩とどこか深いところでむすびついていると思う。

手で何かを作るのが好きだったくせに、手先はとても不器用なんだ。小学生のころ、友だちとふたりで、ボール紙の汽船を作ろうとして船腹のアールがどうしてもうまくできなかったくやしきは、いまでも忘れない。滑走するだけで飛び上らない一本胴やら、けずりすぎて翼が左右不ぞろいになったソリッド・モデルやら、そういう思い出にはこと欠かない。模型飛行機の中で、いちばん懂れたのはUコンでもラジコンでもなくて、ゴム動力の羽ばたき機なんだけれど、これはメカニズムが微妙でぼくの手には負えなかったな。

近ごろ銀座の露店なんかで売ってる、ビニールばりの鳥のおもちゃがハタハタと空高く飛びまわるのを見ると空しい気持ちになる。こういう挫折感、とはまた少々大げさだが、それが意外に強くぼくの生きる方向を決定してるんじゃないかな。子どもって、好みのおもちゃを択んでゆくことで、世界と自分のかかわりかたをつくり上げてゆくんだと思う。で、ぼくは自分の能力と好みの間に、いつも或るずれを感じてきたわけ。そのずれに、ぼくの言語へ向うエネルギーがあるというふうにも思える。

いわゆるA級のライト・プレーンに熱中してたころのぼくの夢は、自分の作った機が青空に吸いこまれて行方不明になってしまふことだった。実際にそれくらいよく飛ぶやつを作ってる器用な連中もいたんだよ。でも、ぼくの作るのはせいぜい校舎の屋根を飛び越える程度だね。けれどそのときの感情は、いまジェット機でウイスキー飲みながら空を運ばれてゆくときの感情とはまったく別のものだったと思う。

おもちゃへの郷愁があるわけじゃないんだよ。ただ、いまの日本はどこを見ても玩物喪志って言いたいような時代だからね。みんなが何かを（言葉も含めて）いじくりまわして、その物の本当の重みを計りかねてるみたいな気がするから、かえって子どものころのおもちゃを通してとらえていた世界の姿が新鮮に感じられたりするんだな。

墜ちた男

ショート・ショート

十和田誠

彼は詩人だった。そして彼は高所恐怖症だった。

彼は詩人であるにもかかわらず、高所恐怖症だったのか、それとも彼は詩人であるが故に高所恐怖症だったのか、それともまたただ単に、彼は詩人であり、かつ高所恐怖症だったのか、そのところは私にはよく分らない。

けれど彼自身は、自分は詩人のくせに高所恐怖症だと思いこみ、そのことに少々劣等感を抱いていた。いやむしろ、そのことに一種の恐怖すら抱いていたといえるかもしれない。

即ち彼は高所に恐怖を感じるにとどまらず、高所恐怖症にまで、恐怖を感じていたらしい形跡があるのである。

それというのも彼が、詩人という存在は天使の次に高所に棲息する生物であると、きめこんでいたからであった。このいささか古風な観念を攻撃する気持は私には別になかったのだが。

とにかく彼は詩人だった。彼は或る同人雑誌に、月々三百円の会費を、（詩人らしくもなく！）きちんきちんと払いてみ、その功績によりその同人雑誌の正式の同人であるとみなされていた。

それ故にまた、彼は詩人たちの間では、詩人として通っていた。だが、詩人ならざる世人の間で、詩人として通っていたかどうかは、やや疑わしい。

というのは、彼はいわゆる詩人らしい恰好もしていなければ、詩人らしい顔もしていず、詩人らしい生き方さえしていなかったからで、これはもっとも、現代の詩人にとっては、当然のことであった。

彼は、地味な背広を着て、地味なネクタイをしめ、少しよごれたワイシャツに、もう少しよごれたズボン下をはいて、

会社に通っていた。

なんの会社かということは、ここでは触れない。彼は比較的ひんぱんに勤務先を変え、その職種も相当広範囲にわたっていたので、話が混乱するおそれがあるからである。

会社の話が出たついでに、彼の詩について言っておくが、彼の作品についてもここでは触れない。理由は簡単、難解だからである。

彼がひんぱんに勤務先を変えた理由は、もちろん高所恐怖症のせいである。二階三階ならまだしも我慢できたが、六階七階にあるオフィスになど、彼はとうてい通いきれなかった。それでも二三日は、窓の方を全く見ないようにして、自分で自分を一階にいるのだといつわっていることもできたが、停電でエレベーターがとまってしまつて、階段を下りたりし始めると、もう駄目だった。

高所恐怖症を、どうにかしてなおしたいと思つたことはなん度もあつた。空中撮影のふんだんに出てくる活劇映画を最前列で見たり、友人につきそつてもらつて、目かくしをしてテレビ塔に上り、展望台で目かくしをとつてみたことさえあつた。(その翌朝、一滴も酒を飲まなかつたのに、彼は猛烈な二日酔にかかつた)

だが、すべての努力は無駄で、彼はやがて高所恐怖症のほうをあきらめ、詩人のほうを、なおすことにした。といつても、詩を書くのをやめるのではなく、高所恐怖症と矛盾せぬような詩と詩人の概念を考え出すことにしたにすぎない。

天使に次ぐ高みから、浮世を見渡そうという努力は、きれいさっぱり忘れ、彼は自己に忠実に、ひたすら地上に生き始めた。詩人といつても人間である以上、地上に生きるのが当然なのだが、彼の生き方はさらに徹底していた。

まさか芋虫のように、地面をはいずりまわるようなことまではしなかつたが、彼の背中はだんだんに猫背となり、彼の眼はたえて大空に注がれることはなく、もっぱら自分の足下に注がれていた。そのおかげで、ちょっとした小金の人った財布を拾つたことさえあつた。

彼は三日ばかり悩んだあげく、それを交番にとどけずに猫ばばしてしまつたのだが。

彼は飛行機を、野蠻な乗物として軽蔑し、宇宙ロケットなどという代物には、興味さえもたぬようになった。空にあるもので、彼が許す氣になれたのは、太陽とかなぶんぶんくらいのもので、前者は絶対の必要悪として、後者は空を飛ぶと

同時に、馬糞をも好むという習性によって、彼の憎悪を免れていた。

当然の論理的帰結として、彼はやがて天使の存在を否定し、天国をナンセンスときめつけ、神は無と同義語であると主張し始めた。この主張は、宇宙ロケット不感症にくらべると、はるかに通俗的であり、かつ適当に当世風だったので、彼の仲間の詩人たちは、おおいに彼に共感し、彼はしばしば議論の主導権すらにぎるようになった。〈この地上にこそ一切は在る〉と彼は、割合に冷静な声で言った。〈この地上の汚辱、そこにこそ連帯への希望がある〉彼は、安酒をなめながら言った。〈足を地につける、詩人こそ最高のリアリストたれ！〉

だが、或る晴れた冬の日、悲劇が起った。正確に言えば、悲劇の第一幕が始まった。

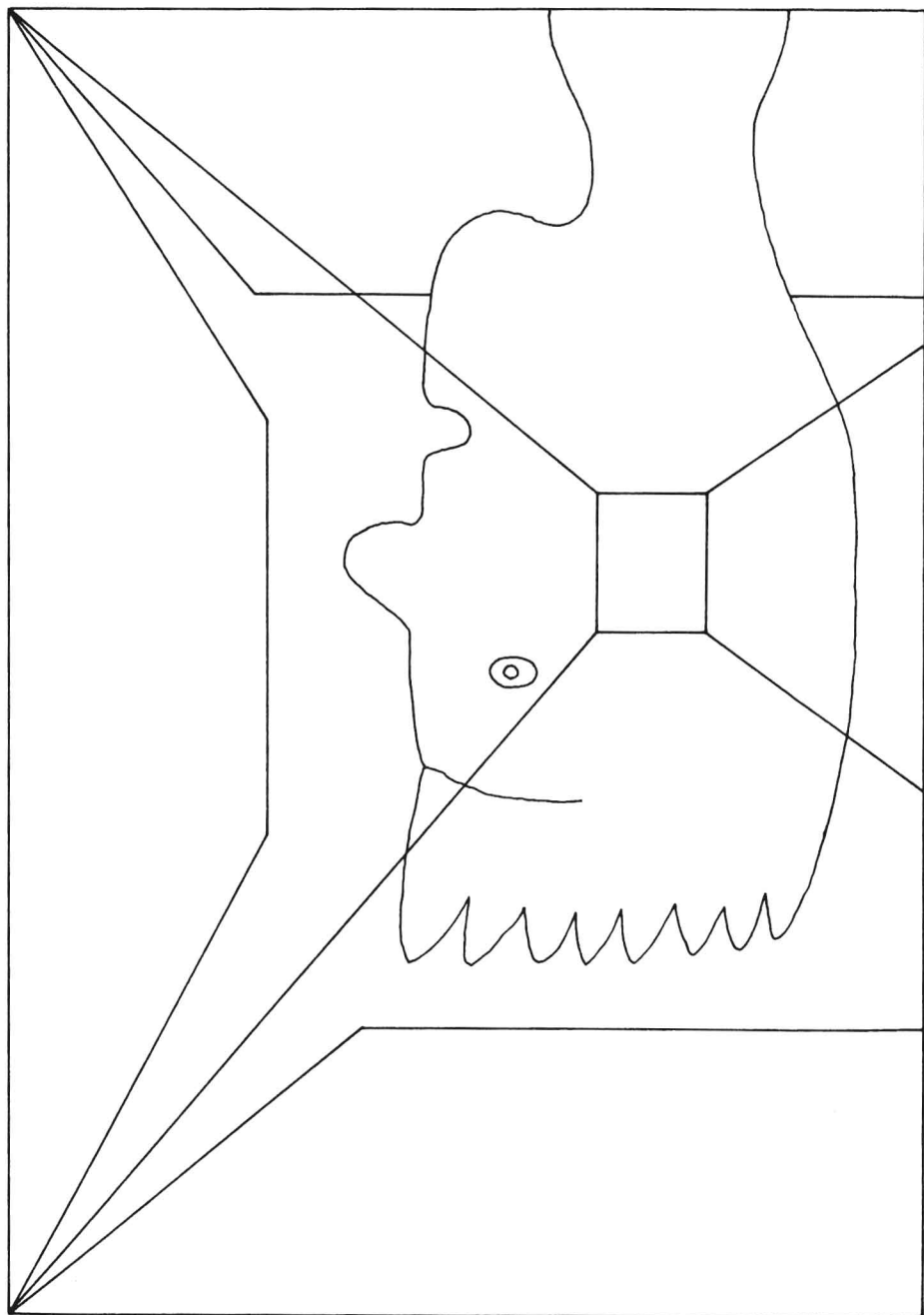
その日彼は久しぶりに都会の中心部に出た。道路は相変らずあちこちで掘り返され、小頭症の案山子のような黄色の標識灯が無秩序に立ち並び、巨大な機械類の振動が、大地をゆるがしていた。心を彼の地上の同胞への絶望の念で一杯しながら、彼は相変らず背を丸めて歩いていった。彼の靴は、すりきれかかっており、彼の財布は軽かったけれど、彼は自分の、あらゆる意味での「低さ」に、殆ど自虐的な快感を感じていた。

その時突然、彼は足元に一筋の光を認めた。その光は奇怪なことに、空中からではなく、地下から射ってきていた。彼は立ち止まり、足元の道路がひびわれているのを発見した。よく見ると、道路と違っていたのは、実は多数の木材の連結されたものであって、光はそのすき間からもれてきているのだった。彼の心は不吉な予感に戦いた。何かとりかえしのつかぬことの起りそうな予感、自分が全くあやまったことをしていたのだという予感、その強い力が彼を歩ませ、彼は無意識のうちに何やら巨大な機械が轟々と動いている、道路の末端に來た。

道路はぽっかりと大きな口を開けていた。そしてその下で、こうこうたる電灯のもと、地下五階にわたる巨大な駐車場の工事が進められていた。一瞬にして彼は悟った。自分がいかに高いところにかいたかということ。

常人にとっては、多少の好奇心の対象となったにすぎぬこの工事の光景が、彼にとっては地獄を見たに等しかった。地上に安心しきっていた自分のうかつさを反省するいとまもなく、彼は失神した。

素面ではもともと寡黙なほうだったが、その日以来、彼はますます無口になった。しばらく鎮まっていた高所恐怖症はよみがえり、彼はもう街を歩くことにさえ、恐怖を感じるようになった。足の下にいつも巨大な空洞を感じ、足の裏は永



久にしもやけにかかったかのようにたえずむずむずした。

彼は自分もあの地下の工事場で働く人間になりたいと思った。けれど、そこへの上り下りを考えると、その計画を実行する勇氣はとうていなかった。彼は自分を、高さも分らぬ中空に、中ぶらりんになっているかのように感じた。食欲はおち、睡眠もとぎれがちとなり、彼はみるみるうちにやせおとろえた。そうして遂に或る朝、悲劇の（或いはこうなった以上、喜劇のといふべきかもしれない）幕切れがやってきた。

幕切れは、実は大変あつてなかった。その朝、彼はどういう風の吹きまわしか、数年ぶり、ふと空を見上げたのである。空は珍しくスモッグもなく、見事に晴れ上っていた。それはどこまでもどこまでも、まるで青という色そのもののように青かった。久しぶりに眺めたせいとその青がひどく眩しく、彼はすぐ目をつむりかけた。だが目をつむりかけるその一瞬に彼はとりかえしのつかぬことを考えてしまったのである。

へ高い低いというが、一体どこを基準にして計ってるんだ。この地球だって、他の星から見れば、とんでもない空の高みに在ることになるんだろうに」

今度こそ彼は、身も心も凍る真正の恐怖、あらゆる恐怖のどんずまりの恐怖の、あの果てしないめまいを感じた。彼は世界中で一番高いところのぼった高所恐怖症の男となった。彼は思わず長い長い悲鳴をあげた。

その瞬間、重力を喪失し、あらゆる支えを失って、彼は無限の青空にむかって、小石のように一直線に墜ちていった。彼がかつて鼻先で笑ったあの宇宙ロケットのように。

彼の墜落を、昇天の一変形にすぎぬとする識者もいるが、今もって私はかかる俗論には賛成しかねるのである。

押入の中

ショート・ショート

十和田誠

彼等二人にとっては、もう習慣といってもいいようなことだった。他に行くところもなかったので、二人は午後になると、よくそこへ行った。

衣類だの、寝具だのの置かれてある小さな部屋で、二人はそこを押入と呼んでいた。事実、押入に毛のはえたようなせまざだった。一方に扉があるだけで、三方は壁、だが、中に入っているものが、みんなやわらかいものばかりだったので、何となく安心だった。

扉を閉めると、はじめは真暗だった。やがて眼がなれてくると、扉のすきまからもれてくるわずかな光線のおかげで、かすかにおたがいの顔もわかるようになる。

それまでは、二人はいつでもじっと布のかたまりの上に座り、おたがいの心臓の音に耳をすませているのだった。

命令するのは、常に彼女の方だった。時には彼女の方が、おいしやさまになることもあったが、その時でさえ、彼女は、どことどこをどうやって診察するのかを命令した。

それは彼女の方が、彼より二つ年上だったということにもよるが、それだけが原因ではなかった。一種盲目的な、女性の生命力とでもいふべきものにおいて、彼女は彼にまさっていた。そして彼女は、自分でそれとは気づかずに、その力をあらゆる場合に誇示し、利用したのだ。

「おいしやさまごっこ」の形式は、どんな場合にも注意深く守られていた。それは或る種の儀式のようだった。最も興味をひくもの、最も神聖なもの、最も秘密なものに近づくために、二人は出来るだけ長い時間をかけた。それは、子供が本

能的にもつことの出来る、ひとつの知恵だった。

おいしゃさまというのが、どんなことをするものかということは、彼女の方がよくおぼえていた。時には彼女は、愛想を言ったり、咳ばらいをしたり、あやすように笑ってみせたりして、彼女のおぼえているおいしゃさまの像を描き出してみせた。

彼はそんな時の彼女が、あまり好きではなかった。自分の知らない世界へ彼女が行ってしまうのではないかという怖れを、彼は感じた。

「さ、おくちをあーんとあけて」

それはいつも、そういう言葉で始まった。彼がのどの奥で、小さくあーと言いながら口を開けると、彼女の方も同じようにあーと言いながら口を開けた。

二人の息はドロップのにおいがした。二人は自分の息のにおいと、相手の息のにおいが同じなのに、いささか不満だった。だが、たがいの息がまじりあうのは快かった。手をつないでいる時よりも、もっと親しく暖いものを、二人は感じあった。

「すこうしのどがはれてますね」それとも、

「のどはだいじょぶ。オペラだって歌えますよ」

この二つのきまり文句を、彼女は上手に使いわけた。彼はいつも心の中で、彼女がどっちを言うだろうかと、自分を相手に賭けをしたが、それは一度もあたったことがなかった。

一度彼が、おいしゃさまになった時、

「おや、ドロップがみえますよ」と言ったことがあった。その瞬間、二人とも吹き出し、二人とも口の中のドロップを、どこかへとばしてしまった。それがあとで彼女のスカートにくっつき、もう少しで二人の秘密がばれそうになった。それ以来二人は、前もってドロップを噛みくだいて、食べてしまうことにしていた。

「それじゃ、ちょっとおみゃくをはいけん」

次に来る言葉は、こうに決まっていた。彼女は彼の手首をとり、本当に脈のあるところを素早く探し出し、ひとつ、ふ